

京都大学	博士（総合学術）	氏名	岩寄 唱子
論文題目	幼児期からの好奇心の発達に関する研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>知的好奇心 (Epistemic Curiosity: EC), すなわち新しい知識を獲得しようとする欲求は, 子どもの認知発達促進に重要と考えられるが, その実証研究はほとんどおこなわれていない。本論文は, 幼児期の EC の測定を試み, 測定された EC と認知機能との関係, 養育者や教師との関係を発達心理学的に検討した。その際, 個人特性とされる特性 EC (質問紙により評価) と, 情報刺激によって一時的に高まるとされる状態 EC (行動指標で計測) の両方またはいずれか一方を用いた。</p> <p>第 1 章では, EC を駆り立てるとする要因について概観し, 新しい環境を探索する (I-type) EC と, 特定の情報を求めて探索する (D-type) EC に分類する近年の研究の理論について議論し, 理論に基づいた EC の評価方法について論考した。</p> <p>第 2 章では, EC の指標として, 親が子の好奇心について質問紙で回答する主観的評価と, 子どもが動作メカニズムを知ろうとしておもちゃを探索する時間による客観指標との 2 種類を測定し, それらが認知発達検査の成績と相関するかどうかを調べた。まず, 英語版をもとに日本語版の EC 質問紙を作成し, その妥当性を確認した。3-6 歳の幼児を対象に, 質問紙 (137 名の親が評価) とおもちゃの探索時間を調べる実験 (上記の親の幼児 36 名が参加, 因果関係が明白なものより曖昧なおもちゃを好むかどうかを測定) とを実施した。その結果, 幼児は曖昧なおもちゃを明白なおもちゃより長く探索することが分かった。また, 曖昧なおもちゃの探索時間割合 (D-type EC の指標) が高い幼児ほど認知機能 (知識) が高いという相関が示された。一方, 質問紙での親による EC 評価は (I-type, D-type のいずれも), 曖昧なおもちゃの探索割合とも認知機能とも相関がなかった。</p> <p>第 3 章では, 幼児の D-type EC 行動の発現と実行機能が関連するかどうかを調べた。4-6 歳の幼児 (計 56 名) を対象に, 意思決定場面における情報探索量を調べる実験で EC を測定し, 併せて実行機能を測定する実験課題も実施した。情報探索の課題では, 探索が自由にできる場面 (非コスト条件) と探索のたびにコストがかかる条件 (コスト条件) の 2 条件が設定された。その結果, 幼児はコスト条件において, 情報探索量を減少させることが分かった。また, 実行機能の 1 つである抑制機能が高い幼児ほど, コスト条件での情報探索量が減少するという相関が示された。</p> <p>第 4 章では, 養育態度と幼児期・学齢期の子どもの EC が関連するのかどうかを横断研究にて調べた。3-12 歳の子をもつ養育者が, 自身の養育態度 (応答性, 統制性) と子の EC について質問紙評価に回答した。結果, 親の応答性が高いほど子の EC が高いという相関が見られ, 重回帰分析の結果, I-type および D-type のどちらの EC についても, 親の応答性と子の年齢が EC を有意に予測した。これらの結果は, 親の高い応答性は子の EC を高めること, 学齢期後半 (小学校 4-6 年) ではその関係が弱くなること, を示唆する。</p> <p>第 5 章では, 社会実装として, 教育現場における EC を育む支援について論考した。教師が応答的な態度で子どもの自律性を支援することが EC の育みにつながる</p>			

可能性から、教師自身による応答的態度の自己評価モニタリングに使用できる評価ツールを作成した。

第6章では、幼児期からのECの育みについて、実証研究から得られた新たな知見を整理した。幼児の情報探索は、個人の認知能力に応じた適度な情報刺激によって促進される可能性、幼児期においても、情報探索を抑制しない環境設定の重要性、養育者がECの育みに重要な役割を果たす可能性について論考した。今後の課題として、実験課題で評価した情報探索が実験場面に制約されていること、特性ECと状態ECの関係の解明に至っていないことなどが指摘された。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、好奇心のなかでも「新しい知識を獲得しようとする欲求」である知的
好奇心 (Epistemic Curiosity: EC) がどのように育まれるのかを実証的に検討し
た意欲的な研究である。ECは子どもの認知発達促進に重要と考えられるが、その
実証研究はほとんどおこなわれておらず、未開拓の研究テーマである。ここでは、
複雑な言語的教示が困難な幼児に対してどのような方法で好奇心を測るか、とい
うところから出発し、子を対象とした実験および親への質問紙調査を併用し、測定
されたECと認知発達との関連を調べ、また、幼児期から児童期にかけての養育者
の養育態度とECとの関連について調べることで、好奇心を育む支援の可能性を論
じている。

まず第1章において、近年の理論に基づき、ECを2種類に分けてとらえることを
提起した。1つは、新しい環境を探索する (Interest-type: I-type) ECであり、も
う1つは、特定の情報を求めて探索する (Deprived-type: D-type) ECである。こ
うした先行研究の整理は、本論文の基本的な価値を堅固なものにしている。

第2章において、ECの中でも、持続的な個人特性とされる特性ECを親が評価す
る質問紙を作成し、その上で、最近の実験研究で用いられているおもちゃの探索活
動によって状態ECを客観的に測定する方法も用い、上記の質問紙と探索活動の両
面からECをとらえようとした。これは、オリジナルな統合的視点であるといえ
る。また、ECが学習を支えるという暗黙の仮定について、実証的な検討をおこな
った点は野心的である。これまで、乳幼児期の探索活動が後年の知能指数と関連す
ることを示した研究はあったが、幼児で探索活動と認知機能の両方を同時にみた研
究はなかった。本研究では、親の評価による質問紙でのECと探索活動でみた幼児
のECとの関連は見いだせなかったが、探索活動と認知機能との関連を幼児期にお
いて確認できた点は、学術的にも高く評価される。

第3章では、ECの指標となる探索行動の発現が、一般に幼児期に比べ青年期や成
人期では少ない傾向があることの原因として、幼児では大人より実行機能が未熟で
あることが関係しているのではないかと仮説を立て、ECと実行機能との関係を
調べた。ECの指標としては意思決定場面における情報探索量を用い、実行機能に
ついては、その下位機能であるワーキングメモリと抑制機能を行動的に測定した。
4-6歳を対象に実験をおこなった結果、探索するには手持ちの資源が減る「コスト
条件」では、抑制機能が高いほど情報探索量が少ないという相関がみられた。従
来、実行機能の未熟さが幼児の情報探索の多さをもたらすとの暗黙の仮定はあ
ったが、それを「コスト条件」を設定することで示すことに成功した点は学術的
にも高く評価できる。

第4章では、3-12歳の子を持つ養育者を対象に、養育者の養育態度と子どもの特
性ECとの関連を検証した。応答的な養育態度が子どもの高いECを予測すること
を示した初めての研究であり、貴重な成果といえる。

第5章では、子どもの自律性がECを促進するという文献調査の結果に基づき、教
育現場で子どもの自律性を育むための教師用ツールを開発した。子どもの自律性は
教師の応答的態度によって育まれると考えられることから、教師が自身の応答的
態度をモニタリングするための自己評価指標を作成した。現場の教師から有用で
ありとフィードバックをもらっており、今後の社会実装が期待される。

第6章では、本研究の学術的意義および、ECの評価方法について議論を行った上
で、限界と展望について言及している。

以上、本論文は、ECを促進する支援を検討すべく、幼児期の探索行動と認知機
能との関連を実験的に、また、養育者の態度と子のECについて幅広い年齢の子
を持つ養育者を対象に質問紙を用いて検討した。幼児や児童を対象にする場合、
自己評価の困難さから手法が確立していなかったところを、行動実験までを行い、
支援についての議論を構築した。

他方、(1) サンプル数が少ない、(2) 実験課題で評価した情報探索が、実験

場面に制約されている，（3）特性ECと状態ECの関係の解明に至っていない，などの改善点が指摘できる。しかし，これらは本論文の価値をいささかも損なうものではなく，さらなる研究発展のための課題とされるべきである。

よって，本論文は博士（総合学術）の学位論文として価値あるものと認める。また，令和5年1月27日，論文内容とそれに関連した事項について試問した結果，合格と認めた。

なお，本論文は京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し，公表に際しては，（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降